

県立美術館を考へる

〇一〇

上原 誠勇

いよいよ沖縄にも県立美術館ができる。先日の「県立美術館構想検討委員会」発足のニュースは美術関係者をはじめ、美術ファンを大いに喜ばせた。一九九七年に着工し、二〇〇〇年にオープンする予定である。しかしながら、これまでの道のりを考えると「やっと動き出したか」の感はぬぐえない。と言うのも、

を訴え著名運動を繰り広げた。県に再三の陳情をしたが、思うように進展せず、半ばあきらめのムードが漂っていたのである。沖縄の美術文化は、戦後の荒廃

ら県内にも民間のギャラリーが増えはじめ、現在では四十軒近いとみられる。今日のこのような県内美術状況を考えれば、「遅すぎる行政の対応」といえるだろう。と

夢が膨らみ、大いに期待が持てる。公園の中に美術館があり、休日には館内のレストランでランチといきたい。駐車場もすべて地下にして、一面のグリーンが森でありたい。屋外で彫刻展ができるような、屋外ギャラリーでもあるといいだろう。環境と美術(特に彫刻)は切っても切り離せない関係にあるから、ぜひお願いしたい。

美術館の規模は一一、三〇〇平方メートルの敷地に総床面積八、〇〇〇平方メートル(約二、四〇〇坪)で、日本の公立美術館の平均的なもので、中規模の美術館になりそうだ。唯一

しかもいけない。日本の美術が西洋をお手本に発展(?)した歴史から見れば当然かもしれない。しかしその一方で、アジアの美術や、地域固有の美術が注目を集めていることも確かだ。そのことはドイツの統合、ソ連の崩壊、バブル経済崩壊と急速に時代が変化しているのも拍車をかけている要因の一つといえるだろう。また、美術という枠や、お上の定めた美術の制度、日本画の問題等、日本のアイデンティティーとからんで検証が始まっている。そんな中で、注目されているのが福岡市立美術館だ。国内でいち早くアジアに目を向け、数多くのアジアの現代美術をコレクションしている。欧米の

動き出した美術館

公の本格的な美術館の必要性は二十年以上も前から関係者やファンの間で叫ばれていた事であり、手薄な文化行政に周辺の不満が絶えなかったからである。熱心な美術家たちや団体は常々、その必要性

した状況でもいち早く花が咲いてきた。学校の教室を利用した展覧会場には、万人の人びとが足を運び、美術ファンの多いことはたれもが知るところ。また、十年ほど前か

もあれ、あと七年で県立美術館ができる。体育館や市民会館での美術展をもう少し我慢するとしよ

さて、新聞の記事によれば設置場所は大久野郡心地区になるようである。約二万坪の土地を確保し、

帯を文化ゾーンと位置づけるようだ。二回目の検討委員会では、並設する博物館と連動させ「美術の森構想」話が出ているという。ど、同規模の敷地と総床面積とな

さて、二十一世紀を見据えた基本コンセプトを打ち出せるだろうか。専門家の十分な検討を加えた個性ある美術館であってほしい。(画廊沖縄代表)



上原誠勇氏

幅広い視野で収集を

美術の森構想に夢膨らむ



文化

人は印象派絵画好き、というのも有名だが、各地の美術館が近代ヨーロッパ絵画に偏重してコレクションしていることだ。欧米の美術マーケットで信じられないような高額で百年前の近代絵画を購入している現実がある。個性ある美術館づくりが唱えられて久しいが、偏重したコレクションが今問われているのである。明治以来の西洋個性ある美術館であってほしい。(画廊沖縄代表)